第２回守山市環境審議会　議事録(議事要旨)

開催日時：令和 5（2023）年 2 月 14 日（火）14 時 00 分～16 時 00 分
開催場所：もりやまエコパーク交流拠点施設　環境学習室/オンライン
出席者：【委員】
（対面出席）
河瀬委員、島田会長、長田委員、藤井委員、武田委員、松田委員、南井委員、木崎委員、北野委員、田中委員、津田委員
（オンライン出席）
白井委員、石原委員
【守山市関係者】木村環境生活部部長、高橋環境生活部次長、伴環境政策課長、田中環境政策課参事、杉江環境政策課主任

次第：
・開会
・会長挨拶
・報告事項
(1)第 2 回脱炭素部会について
(2)市民懇談会の開催結果について
・審議事項
(1) 脱炭素に関するビジョンと施策の方向性について
・閉会

1.　報告事項

第 2 回脱炭素部会について

- （委員）脱炭素部会の資料に、関西電力と大阪ガスの脱炭素に関する取組についての資料が添付されているが、特定の企業の資料を出した意味合いは何か。
  →（脱炭素部会長）次回の脱炭素部会では、2030 年、2050 年に向けた将来の二酸化炭素排出量の推計結果を提示する予定。計算をする際に、電力の排出係数等色々なパラメーターを設定するので、その参考として、守山市を取り巻くエネルギー状況や社会全体でのエネルギーの大規模供給面がどうなっているのか、資料を提示いただいた。全てこれを前提に計算するのではない。
  →（会長）補足をすると、今後、需要側の事業者を含め様々なステークホルダーに脱炭素に関する取組についてヒアリングを行う予定なので、その取り掛かりとして、まず委員である 2 社に 5 分程度ずつ取組をご紹介いただいたものである。

市民懇談会の開催結果について

- （委員）市民懇談会の回数（1 回のみ）とアンケートの回答率（2,000 名のうち回答者数 100 名）について、どのように思われたかご意見を伺いたい。
  →（事務局）懇談会を何回も積み重ねていくという考えは現段階ではないが、今回アンケートも

実施し、また最終段階ではパブリックコメントも実施する。今後審議会でも議論を積み重ねていく中で、どう市民との合意形成を図っていくのかというところも検討していきたい。アンケートについては、確かにもう少し回答期間が取れれば良かった。今回は QR コードを読み込んでお答えいただくという手法を取っており、アンケートの取り方も含めて、今後市全体でも議論をしていくべきと思っている。

- （委員）案内を出された人数の 100 分の 1 ぐらいの出席率だが、事務局としてどのように分析されているか。
  →（事務局）参加人数はもう少し多い方がよかったと考えるが、開催する日時（土曜か日曜か、午前か午後か）によっても参加のしやすさが変わるので、もっと多くの方に参加していただけるよう検討していきたい。今回確かに参加人数が少なかったが、年齢階層また男女区分も混ざる中で長時間の議論をいただいたので、一定のトレンドは見れたと考えている。

- （委員）清掃活動に参加するなど身近なところから若い方でも関心を持った方が増えていくことが、今後取組を続けていく中で大事だと思う。市民参画に若い層が増えるかどうかは、これから先 5 年後とか 2030 年を目指していくときに大きなバロメーターになるので、興味の引くやり方で市民参加を図っていくとよいと思う。

- （委員）QR コードを用いてアンケートを取ったというところは、ペーパーレスでなおかつまとめやすく、懇談会に来ないような若い世代の声も届きやすくなるので、いいことだと思う。

- （会長）SNS やスマートフォンに慣れ親しんでいる若い世代がアンケートに答えてくれるというのは非常にありがたい一方で、高齢者の方々などそういうツールの使い方に慣れてない方が答えにくいという問題もあるので、ぜひ工夫していただきたい。

2. 審議事項

環境ビジョンと施策の方向性について

①環境ビジョンの構成に関するご意見

- （会長）重なり合っている部分を意識して取り組むことは大変重要。相乗効果があることもあれば二律背反的な事象も起こりうるが、バラバラに議論するとそこが抜け落ちる。重なり合うところも議論していけば、非常に先進的な計画になるのではないか。例えば脱炭素と資源循環は重なり合うところを定量的にも評価し得る分野なので、重なり合う部分の定量評価にもチャレンジしていけると、さらに新規性、先進性のある計画になる。

- （委員）今回の環境基本計画のベースは脱炭素ではないかと思う。ビジョン同士の関係性について、「脱炭素を実現するまち」が他の 4 つのビジョン「自然共生」「資源循環」「快適な暮らし」「未来へ繋ぐ」の全体を覆っているイメージで考えてはどうか。例えば、「カーボンニュートラルを実現するためのライフスタイル」は、様々な分野での取組が重なって実現する話。

- （委員）どこかに焦点を当てないと、焦点ボケしてしまう可能性がある。例えば、「自然共生」にある水辺環境への取組は、脱炭素への寄与度は少ない。脱炭素を全項目に割り振ってしまうと、それらを数字として出して、全体としてゼロになるよう整合性を取るのが難しくなるのではない

か。また、4つのビジョンが繋がる先は環境教育と書いてあるが、他の自治体との連携や情報交換などにも力を入れて、それをまた4つのカテゴリーにフィードバックするというスタイルがよいと思う。

- （委員）2050年までに社会全体を脱炭素化するためには、かなり頑張らなければならない。とはいえ、生物多様性も、脱炭素と相反する部分もありながら今後かなり重要である。4つのビジョンが重なり合っている図は、今後社会を考えていく上で重要なのは脱炭素だけではない、ということを表していると理解できる。

- （委員）資料の図は、SDGsウェディングケーキモデルの基本の部分がうまく落とし込まれていると感じる。

- （委員）資料の5つのビジョンの位置づけは、市民がぱっと見たときにもわかりやすいと感じた。市民懇談会のアンケート結果において、「先進的であると考える分野を教えてください」という設問には河川やホタル、ごみへの関心度合いが突出していたが、「今後重点的に進めていくべき取組」に対しては、突出度合いが比較的平らであった。これは、これまで守山市が重点的に取り組んできた部分が市民に大きくアピールできている一方で、他にも重要度が高いものがあることを市民が認識しているということだと思う。この結果を踏まえた上で、市長のメッセージにもあったように「脱炭素・生物多様性・環境教育」も織り込みながら進めていくとよいのではないか。

- （委員）全体的なまとめとしては非常にわかりやすくまとまっている。脱炭素は非常に重要だが、市民レベルで脱炭素を取り組んでいくのは非常に難しく、エネルギー会社などがかなり頑張らなければいけない。それと併せて市民運動などがうまくリンクできればよい。脱炭素だけが環境問題ではないので、自然共生や快適に暮らせるまちなども合わせて取り組みながら、結果的に脱炭素が実現されていくというところが、目指すべきところだと感じる。

- （委員）守山が豊かになる、人も地域も元気になる、若い世代が守山で環境分野の事業を起こす、今まで考えていなかったような生業が起こる、というような新しいムーブメントが起こることも大事。地域経済循環の話が全く出てきていないが、例えば大きな企業が来て全部利益がそこに行くのではなく、守山にいる様々な人たちの知恵によって新しいものが作られていくということがよいので、織り込んではどうか。

- （会長）市民懇談会では、琵琶湖環境科学研究センターが作られた「二つの持続可能社会の姿」という資料を配布している。二つの世界の姿どちらを選ぶとどういう暮らしになるのか、何でどう食べていくのかということが書かれている。そういう視点は本当に重要。

- （委員）市民の方にできるだけわかりやすく伝えていくことが大事。ビジョンのところまではわかりやすいが、施策の方向性や具体的取組は難しい言葉で書かれていて市民に伝わりにくいと思う。できるだけわかりやすく、取り組みやすい雰囲気が伝わる計画になっていくとよい。

- （委員）本来、脱炭素の社会づくりや地域づくりは総合計画とか市の一番上位の計画で行い、その中で環境のことを書いているのが環境基本計画の位置づけ。脱炭素のうちの経済的な部分や交通など都市計画の部分を、どこまで環境基本計画の中に織り込むのかを念頭に置きながら、計画を作っていければと思う。脱炭素というのは社会全体のことがあって初めて成り立つことなので、

環境基本計画に入れることと、環境基本計画には入れないけれど総合計画などには入れるべきことを整理しながら、この計画に落とし込んでいく部分や施策の方向性を決めていけるとよい。

- （会長）第１回環境審議会での議論も踏まえて、脱炭素だけではなく他の環境問題にもバランスよく目配りしつつ、脱炭素との重なり合いも意識するということで、資料にある整理の仕方に賛同された方が多いと思う。事象によっては脱炭素とすごく重なるものもあれば、あまり重ならないものもあるが、生物多様性固有の話など重なっていない部分もかなり大事。濃淡はあるものの、重なり合う４つのビジョンとそれを支える「未来へ繋ぐまち」という構成で、今後施策の方向性や具体的取組を考えていくということで、まとめたいと思う。

②各環境ビジョンや施策の方向性、具体的取組に関するご意見

- （委員）環境ビジョンの一つに「快適に暮らせるまち」とある。市民懇談会で語られていた市民の皆さんの望む守山の未来像には、より便利な世界で、車をどうするとか、車が多すぎるからもっと橋や道を付けて欲しいなどという話が多くあったが、気候変動への危機がある今、どこまで快適さを求めるべきだろうかと思う。この危機の中生きていくためには、安心して暮らせることの方が先決ではないか。もう少し「安心」というところもクローズアップしてはどうか。

  （委員）快適な暮らしについて、自然を活かした快適さという意味合いを入れると、快適さと地球に優しいことが両立し、快適に暮らすことや安心安全なまちに繋げることができると思う。

  （会長）渋滞解消のため道路を拡幅したりバイパスを造ったりして欲しいという声があるというのは事実として受け止めないといけないが、一方でモビリティを脱炭素化していこうという中で、こういう意見をどういう位置づけとするかも課題。

- （委員）施策の方向性を書くときに、複数のビジョンにまたがっている部分をどちらに書くかによって印象が違ってくる。例えば「気候変動の影響に対する適応策」は、「脱炭素を実現するまち」の施策の方向性として書かれているが、快適さや安心にも非常に関係している。適応策を「快適に暮らせるまち」に持ってくる整理の仕方もあると思う。

- （委員）地域で行われている活動を伸ばしたり、新たな手法としてブルーカーボンや OECM を織り込んだりするなど、施策の方向性や具体の取組に守山らしさが出るよう考えていただきたい。

- （委員）環境ビジョンを説明する文の語尾が、名詞で終わったり動詞で終わったりしているので、「～になっている」や「～になっているまち」などに統一してはどうか。

  （委員）ビジョンの説明は体言で止めてもらった方がわかりやすい。

- （委員）環境ビジョン「自然と共生するまち」の施策の方向性に「人の適切な営みによる生物多様性の保全」とあるが、「人の適切な営み」という表現が難しく感じる。守山の自然は、里山すなわち人と共生した自然であり、これを人間の生活により守っていく、ということがわかりやすく伝わるとよい。

- （委員）琵琶湖周辺は非常に整備されて他府県の方が大勢来られ、また守山市の人口も増えている。一方で、田畑は後継ぎがいないままになっていて、畦道も手入れができていない状況。農業

がもう少し身近になるような施策を考えていただきたい。

（委員）例えばエネルギーをたくさん消費するビニールハウスではなくもっと農地を活かしたやり方にする、未来の子どもたちの命を守るための農法にする、など具体的な取組にぜひ入れていただきたい。また、取組がかなり進んでいるところでは、廃食油を回収してバイオディーゼルを作って使っている。グリセリンのハウスやボイラーにしてバイオ燃料を使えば、循環型の農業ができる。そこでできた食べ物を子供たちがまず食べる。オーガニック給食も含めて、具体的な取組には面白い案をたくさん出すことができると思う。

- （委員）市民懇談会を傍聴していたが、市民の皆さんが将来こういう風になるといいよねと思っていることには、実は既に守山では取り組まれていたり、十分じゃなくてもその方向を探っていたりすることが多くあった。「未来に繋ぐまち」で「連携と共有による環境への取組の活発化」と書かれているが、市の取組やこの環境基本計画も、もっとみんなに知ってもらえるものにしなければならない。ただ単に連携と共有をするだけではなく、しっかりと市民に浸透して、みんなが取組を実行できるような計画にすることが大切。